

小学校外国語活動を ふまえた中学校入門期 指導のあり方

筑波大学附属中学校
 主幹教諭

いぬま のりあき
肥沼 則明

1 小学校外国語活動の影響

本年度の中学校一年生は、「正規の」小学校外国語活動を受けて中学校に入ってきた最初の生徒である。ただ、実際には全国の多くの小学校ではすでに何らかの形で英語を教えており、中学校入学時に英語活動の未経験者はほとんどいないであろう。勤務校で三分の二を占める生徒の出身校である筑波大学附属小学校では、平成二年度から英語科の専任教師による外国語活動の授業が三年生より週一時間行われている。つまり、本年度の中学校一年生はその指導を四年間フルに受けてきた「一期生」ということになる。

その一年生を四年ぶりに担当して驚いたのは、よくも悪くも四年前の一年生とは大きく違うということである。詳細は後述するが、以前と同じようなやり方をしていただけでは、大切な入門期指導を誤った方向で行ってしまいそうである。

さいわい、一年生の指導計画を主に作成してくれている同僚が過去二年間も一年生を指導しており、過渡期の生徒たちに柔軟に対応してきた経験をもって指導の方向性を考えてくれているので、大きな勘違いをしないですんでいるが、それでも二人で毎日のように過去の一年生とは異なる実態の生徒にどのように対応していたらいいのか頭を悩ませている。

筆者はこれまで何度となく各地の研修会に参加しているが、そこで中学校の先生方から聞こえてくるのは、筆者と同じような戸惑いの声が多い。したがって、「正規の」小学校外国語活動の経験者が中学校へ入ってきた今こそ、入門期指導を改めて見直す必要があるであろう。

なお、本稿で言う「入門期指導」とは、「教科書の本文がある課を教えはじめる前に行う指導」を意味することとする。

2 入門期指導計画作成の必要性

筆者は、中学校の入門期指導ほど「アンタツチャブル」な領域はないと思っている。それは、中学校の英語科教師ならだれでも入門期の指導は三年間の学習成果を左右する最も重要なものであるということは承知しているのに、モデルとなるシラバスや指導法が確立されておらず、個々の教師が自分の経験に基づいてバラバラに指導しているという実態があるからである。もつとも、それは一年でいちばん忙しい新年度の最初期のことなので、ライブの授業研修会等を開きにくいということもあるかもしれない。

さいわい、筆者の勤務校は「オーラル・メソッド」を提唱したH・E・パーマー氏が、自身の理論の実践の場としていた学校であったこともあり、一九二三（大正十二）年より口頭練習を中心とした入門期指導のシラバスが脈々と受け継がれてきており、入門期指導はきちんとした指導計画の下に行われるものであるという意識が英語科に根付いている。もちろん、週六時間も英語の授業があった当時とは条件や時代もまったく異なるので、実際の指導内容は現状に合ったものになっている。そこで、それを入門期指導計画を作成する際の参考例として紹介する。

次ページ表1は、筆者が前回、主担当で一年生を指導したときの入門期指導実績である。このような記録が勤務校の英語科では毎年作られ、それが実質的には翌年の指導計画のもとに

が行ってきた入門期指導の内容をまとめることは、ベテラン教師にとつてもこの先の指導を考えるうえでのベースともなるはずだからである。

3 入門期指導計画作成の実際

では、入門期の指導計画を作成するうえで必要なことを表1をもとに述べる。

①表現(文法事項)

まず、教科書の本文がある課を扱いはじめる前に生徒に教えておくべき表現の一覧を作成する。これには、おもに挨拶やクラスルーム・イングリッシュ等が含まれるが、小学校外国語活動で学習済みで授業中に使えそうな表現の復習なども入れられる。

また、筆者の勤務校のように、教科書の最初の方で扱われるいくつかの文法事項をあらかじめ口頭で導入してしまうのであれば、入門期の間にどの表現を扱うかを検討して入れ込むようにする。

②語彙

小学校外国語活動を経験した生徒は、中学校教師が考えている以上に英語の語彙が豊富である。とくに、「身の回りの英語」は以前であれば中学校で初めて指導する単語の多くを生徒はすでに知っている。したがって、小学校と連携して生徒が何を知っているかを事前に把握し、それらを上手に利用しながら、かつては指導を

躊躇したレベルの語彙までを指導することを考えてもいいであろう。

③文字

『聞くこと』『話すこと』から『読むこと』『書くこと』へ」ということは変わらないが、ここ数年の生徒は以前の生徒と比べて明らかに文字を早く書きたがっている。それはすでに文字で英語を読んだり書いたりすることを中学校入学以前に経験しているからである。小学校外国語活動では「読むこと」「書くこと」は指導していかないはずであるが、実際には児童は授業以外の場所で英語を読んだり書いたりしているようである。したがって、中学校の入門期指導では以前よりも早めに文字指導を行ったほうがよい。それをいつ、どのように行うのかを指導計画に示しておくことは大変重要である。

4 入門期指導の新たな課題

Iでもふれたが、小学校外国語活動を経験してきた新入生に対して入門期指導を行うにあたっては、それ以前の生徒を指導していたときは異なった課題が見えてきている。それらは、一般校では来年度以降により深刻になるとと思われるので、その中の大きなことを二点取り上げる。

①家庭学習をしなくなった

小学校外国語活動は教科ではないため、成績はつかない。また、試験等もないため、宿題も

出されない。そのため、生徒は中学校英語科とはそういうものであると思っており、ここ数年の生徒は以前の生徒に比べて入門期の家庭学習を教師が期待するほどやってくれない。とくに、「書いて覚える」という作業を面倒くさがる傾向がある。

②習字の修正がむずかしい

アルファベットの練習をさせるためにペンマシップを使う学校が多いと思うが、勤務校ではそのお手本どおりに書かせることに以前より多くのエネルギーが必要になってきている。生徒はすでに何らかの形でアルファベットを書いているように(附属小学校では書かせていない)、「なぜこれまで書いてきた文字ではいけないのか?」という有言・無言の抵抗があり、なかなか字を丁寧に書いてくれない。

以上のことは、以前とは異なる経験値をもっている中学校一年生に対して入門期指導を行うにあたって、中学校の教師が注意しておかなければならない生徒の実態である。勤務校でも入門期指導を担当する者の間で議論を重ねながら試行錯誤を繰り返しているが、このような実態の生徒をどのように指導していったらいいのかということ、今後も全国レベルで議論していく必要があるであろう。